



「杉浦千畝(すぎうら ちうね) ”命のビザ”から80年」

この原稿は令和3年1月17日に書いています。

そう、26年前に阪神淡路大震災のあった日です。

コロナ禍で、例年のように慰霊祭は行なわれていませんが、被災された皆様の気持ちは全く変わらないと思います。

私も苦い思いで、毎年この日を迎えています。

当時、私は回生病院で救急医療に関わり、自信を持って仕事をこなしていました。

ちょうどその日が私の当直日で、忙しく救急外来をこなしていました。そして突然の地震でした。

次々運ばれて来る患者は、軽傷から重度な外傷そして圧死まで様々で、一人ですべてをどう見ていけばいいのか分からず混乱して、右往左往するばかりでした。

救急医療と災害医療の違いを思い知らされた次第です。お恥ずかしい話です。

人は、土壇場でどう立ち振る舞うかで、その人の価値が決まるのではないのでしょうか。

一人の日本人の話をしたいと思います。その人とは、杉浦千畝氏です。

「人間として当たり前のことをしていただけ」・・・。

第二次世界大戦中の、今から80年前に、ナチスの迫害を逃れてきた多くのユダヤ人にビザを発給し、彼らの命を救った外交官・杉浦千畝の言葉です。

リトアニアの在カウナス日本領事館に勤務していた杉浦が、ユダヤ人にビザを発給し始めたのは、1940年7月26日ごろで、それから1か月以上かけて、6,000人もの命を救いました。

かれの妻・幸子さんは、その”決断”の時の様子を回顧して「これでいいかい」と私に言うので「そうしてください」と言いましたと述べています。2度にわたり、ビザ発給の可否を本国に確認すると「否」でした。それでもなお、戦時下に訓令違反も辞さず、人道の信念を貫いた夫妻の勇気の行動は、不滅の良心の輝きを放っています。

押し寄せる人が増えることを予想し、8月初めの段階で調書を簡略化し。さらに、効力を担保しつつ、手書きの大部分をスタンプ化することでビザの大量発給を可能にしました。この決断も、彼の緻密な計算や秘策に裏打ちされた”英断”でした。そこには、戦禍の極限状態の中”命を救う”と執念を燃やし、聡明に危機を乗り越え、不可能を可能にした英知が光っています。杉浦千畝”命のビザ”から80年になります。

コロナ禍で環境が激変している試練の今こそ、杉浦千畝のように、より深く豊かな知恵で、この危機を乗り越えていきたいものです。